

日本女体
研究所
実践シリーズ

ヴァー ア ー ン ス ビ ツ チ !

女体開拓編

羽生青未・作
ももしか藤子・絵



日本女体研究所実践シリーズ

ヴァージン・ビッチ!

〜女体開拓編〜



本を閉じた。

昼下がりの図書館。

もう一度、読破どくはしたばかりの、
愛すべき書物の表紙を見つめる。

余韻よいんを味わっているのだ。



熟女の神秘と旨味

「ねえ、ゆきむら雪邑くん……」

テーブルの向かい側に座って、
僕の名を呼ぶ熟女。

「ねえ、まだあ？」



豊満ほうまんな乳房を机の上に乗せ、
上目遣うわめづかいで僕を見る。

机の下では、ヒールを脱いだつ
ま先で、僕の膝ひざ小僧こぞうを突く。

やはり、書物のとおりであった。

熟した果実のような柔肉に飲み
込まれた僕は、
快樂の悲鳴を上げそうになる。

……ああ、悪くない。



「あー、すっきりよお。こんな
の久しぶり。じゃあ、またねえ」

「どうも、ご協力、ありがとう
ございました」

ふう……

任務は無事に遂行すいこうされた。

正しいデータとは、知識と経験
により蓄積ちくせきされていくのだ。

僕は多聞雪邑^{たもんゆきむら}。日本女体研究所の研究職員である。

研究テーマは「女体の神秘」。まさに、女性の肉体の謎^{なぞ}を研究しているのである。

これは遊びではない。真面目^{まじめ}な研究機関であり、立派な公務員である。

さよ。

とうとう、この時が来た。

ベテラン研究員たちが尻込みする課題である。

〈処女という前人未到の楽園〉

なかなかのいわくつきだ。

資料となる数冊の書物を手に、
いつもの図書館の貸し出しカウン
ターへ向かう。

どさりと積み上げた本。
図書カードを差し出す。

「多聞……雪邑さん……」

図書館司書が、僕を見上げた。



「あの……」

「なんだ……？」

「あの、あの、あのあのあのっ」



「好きです……」

あたしは山崎アキコ。

やまざき

短大卒の二十三歳。図書館司書。

「好きです」

この言葉がたまらないんです！

脳みそも鼓動も、「好きです」の
ためにあるみたいなきぶんになる。
この瞬間のために生きてるんだ
って思えるんです。

でも、二十三年間、恋が成就じょうじゆしたことは、一度も、ない。

ふりかえれば、学生時代から数えると、告白した回数は数え切れなから数えられません。

NO



NO



NO



かわいそう、って言わないでください。

だって、この想い^{おも}を心の中だけに閉じ込めておくなんて、そんな苦しいこと、できません。

当たって砕^{くだ}けろ、玉砕^{ぎょくさい}上等。傷つくのを恐れていたなら、誰も好きになんてなれない。

だから、あたし、今日あなたに告白します。

多聞雪邑さん。

名前は図書カードで確認しました。彼が借りた本のリストを眺^{なが}めて、うっとり。

『女体と政治』

『女体とジェンダー』

『女体森という名の女体盛り』

『女体宣言 VS 脱女体宣言』

……

難しい本ばかり。

ちよつと眉間みけんにシワを寄せながら
本を読む姿を、受付カウンタ
ーから眺ながめてきました。

ページをめくる、細くて長い骨
ばった指を、見つめ続けて陽ひが
沈しずむ。

ああ……

見るのが、恋……！



受付カウンターを挟はさんで、
あなたの瞳ひとみを見つめる。

そして、あたしは、

魔法の言葉を遣つかいました。

「好きです……」



雪邑さんが、黒縁くろぶちのメガネ越しに、あたしを、じつと見た……！

「あ、あの、だから、あのあの、その、もし、よろしかったら、えっと……」

付き合ってください……
と、小さく小さくひがや眩くらきました。

「はい、付き合いますよ」

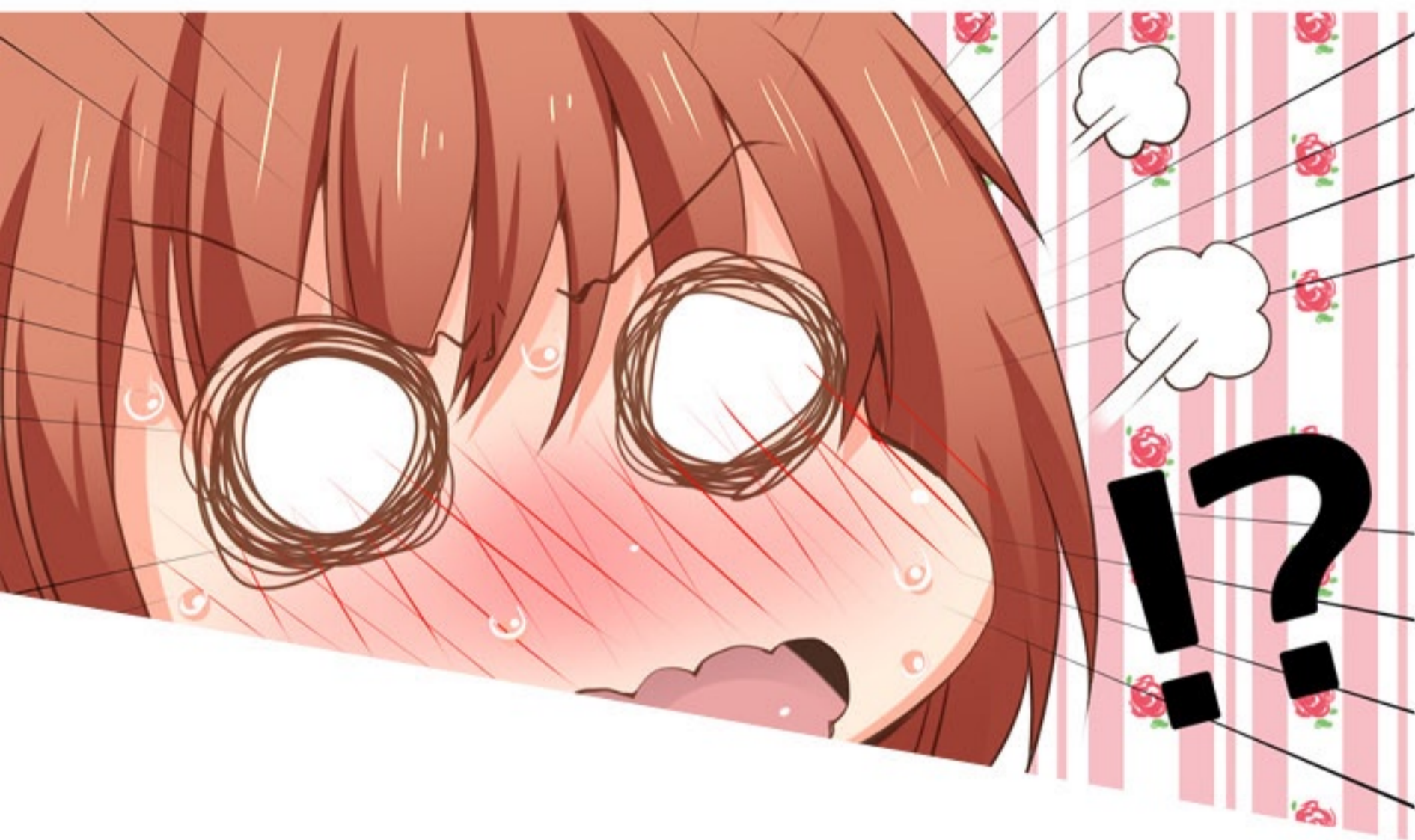
「あ、いいんです、いいんです。見ず知らずの図書館司書からこんなこと言われても引くだけですよね、あの、どうしても伝えたかっただけで……え？」

ヒック。びっくりして、しやうくりが出た。

「いらですよ。付き合いましよ
う」

「……んえん。」

「はい」



「ハジ、ハジ、ハジ……」

息が……できな……

「ハジ、困りますー！」



とららわげで、

ふたりの交際が始まったのだが

……



「五メートルも離れたままじゃ、デートにならないだろう?」

「は、離れていてください！
だってあたし、雪邑さんを見つめていたいただけなんです!」



「思う存分、僕を見るといい」

「こ、こんなに一気に、距離を縮めるなんてっ……！」



「アキコくん。

そろそろ、僕の隣となりに来ないか」



「君のことを、

もっと知りたいたんだ」



「知りたい……って何を？」





「やっと君に、
触れられた」

「いつの間^がに、こんなことにな
っていたのでしょう……」



これから、何が、
起こるのでしょうか……!?



問題は、思った以上に、
僕が本気だということ……

『ヴァージン・ビッチ！ ～女体開拓編～』

羽生青未／作
ももしか藤子／絵

©2015 羽生青未 / ももしか藤子
©parsola inc.